

Marine Turtler

マリンタートラ

特定非営利活動法人

日本ウミガメ協議会 機関誌

2002年5月15日

目次

何を大切にすればいいのか? 亀崎 直樹	1
アカウミガメ保護シンポジウムに参加して 松下 陽子	2
アラスカ・カナダ出張報告 山口 真名美	3
海外だより バリ島のアオウミガメ 菅沼 弘行	5
ウミガメ基礎講座・2・ 松沢 慶将	6
第12回日本ウミガメ会議報告 通事 太一郎	7
今日もボランティアは元気です 山口 真名美	8
ウミガメの来訪 I N小豆島 大鹿 達弥	10
協議会活動報告	12
協議会職員・会員業績紹介	13
協議会会計報告 朽見 健一郎	15
編集部よりお知らせ	16

何を大切にすればいいのか？

個体？種？それとも生態系？

ウミガメの保護と言っても、いろんな考えに出くわすことがあります。例えば、私は以前、ある動物好きな東京の獣医学部の女子学生に、八重山で飼育してもらっていた大切なウミガメを海に放されたことがあります。その学生は八重山からの帰途、大阪の私の自宅に立ち寄って、飼われていたウミガメの悲惨さ、それを許している研究者（私）の残酷さを必死に訴えていきました。これは個体、つまり特定のカメを愛する気持ちの究極の表現であった訳です。

ある砂浜では、ある方が砂浜に生えているハマゴウを必死に除去しておられました。話しを聞くと、ウミガメが産卵のために穴を掘ろうとしても、この植物が堅く根を張っていて掘れない。そこで、この植物を除去しているのだと言うことでした。この方はそこで産卵するアカウミガメという種を守ろうと考へておられる訳です。ところが、同じウミガメが産卵する砂浜でも、海

岸の植物をのを防ぐた

を張っている。これは、植生帯の周りにロープと言え、砂浜の生態系のための行為

正直に告何頭かの子白すると、私はこれまでに

殺すときガメを殺したことがありま

ガメを知るの嫌な気持ちは、脳裏に焼

に貫刺できます。でもそこには「ウミ

確かに残酷ここで、必ずウミガメの為

いる訳です。この「ウミ」という言い訳が存在し、

な行為を正当化する自分が

した人、カ介したように、カメを逃が

人、カメのメのために植物を除去する

植物を守る産卵する海岸を守るために

メを殺す人、そして、カメの為にカ

です。さら（私ですが）までいるわけ

車両が踏みつぶしてしまう

め、植生帯の周りにロープ

る光景を見たことがありま

砂浜の生態系のための行為

しよ。

白すると、私はこれまでに

ガメを殺したことがありま

や性の研究のために子ガメ

の嫌な気持ちは、脳裏に焼

ます。でもそこには「ウミ

ここで、必ずウミガメの為

る「ウミ」という言い訳が存在し、

な行為を正当化する自分が

した人、カ介したように、カメを逃が

人、カメのメのために植物を除去する

産卵する海岸を守るために

メを殺す人、そして、カメの為にカ

です。さら（私ですが）までいるわけ

に、カメのためと称して離

海浜を作ったりする人まで

仲良くなれ。これらの人はお互い当然

全員、カメの訳がありません。でも、

人、つまりや自然のことを考へている

照）なのでマリントートル（前号参

す。

会長 亀崎 直樹

アカウミガメ保護シンポジウム IN 明石に参加して

松下 陽子

何の専門的見地も持たない私がこのシンポジウムに参加したのは、単にカメ好きで開催地が自宅から遠くないという理由からでした。

参加してみて、ウミガメに関わる個人・団体・行政機関には裏に様々なことと、しかも思惑がまちまちなこと、特にウミガメの研究保護に携わる人々と人間生活の利便性を最優先する行政との間には大きな意識の差があることが分かりました。亀崎会長の「それぞれの立場だけで問題点を考えていてもアカウミガメを取り巻く環境は良くはならない。ウミガメ警がりてみんながお互いの立場を尊重しつつ理解を深めていって、連携を取り合っていけたら素晴らしい。」とのお話に納得がいきました。

一番印象深かったのは、新宮市の速水さんの素朴な言葉のつながりでした。

「近年、少年犯罪の増加に心が痛みます。ウミガメさんが卵を産み落とす様子や、卵から孵った子ガメが元気に海に帰って

行く姿を見た子はそんな殺人など犯さな
いと思います。」

産卵・孵化は感動です。命は感動です。卵を移植してはいけないとか、子ガメを風間に海に返すのは危険だとか、とかくご批判を受けますが、私は敢えてそれをやっています。移植しなかったら、卵は海にさらわれて全滅です。孵化した子ガメの半分を子供の手で海に返させるのは、子供たちに感動を与えてやりたいからです。命を大事にする子供がたくさん育っていくことを心から望んでいます。」

より正確なウミガメ情報を収集・公開して皆がウミガメの置かれている現状を正しく把握すること、利害も意見も異にする人々が同じテーブルについてウミガメを語ること、その努力を積み重ねていくこと、それが大事だと思えました。私も、柔軟で理の通った見識をもてるようにあらゆる機会を捉えて学んで行きたいです。

最後に、このようなシンポジウムに参加する機会を与えてくださったことに深く感謝いたします。ありがとうございました。

(会員・兵庫県姫路市在住)



アカウミガメ保護シンポジウム
IN明石

2002年2月1日(金)
ホテルキャッスルプラザにて

熱心に講演を聞く参加者の皆さん(左)

暮いじいじい行って来た。

—アラスカ・カナダ出張報告—

アラスカ編

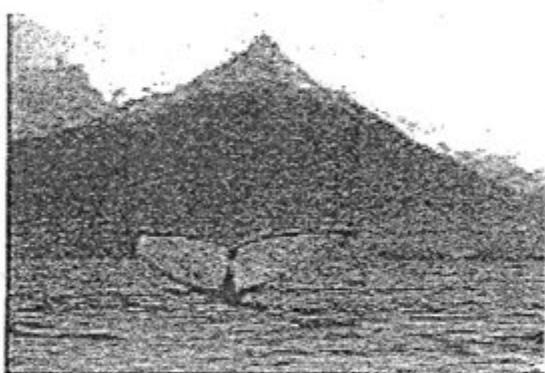
米国アラスカ州南東部に、太平洋に面した人口九千人ほどのシトカという町があります。シトカ周辺の海域は、サトウワシの産地として知られている。またシマキ、アサラシ、ラッコ、アシカなども頻りに観察できることから、ホエール・ウォッチングやネイチャーツアーが盛んに行われています。その昔、アラスカ先住民のクリンキット族の生活や慣習をこの海鳴乳類が支えたことが、現在これらのシマキの貴重な観光業は、重要な産業としてこの町を支えています。

今回、昨年十一月三日にわたって行われたシトカ・ホエール・フェスタ(ワシントン)に講演者として招かれていた。その際、この地域のシマキの観察地(カクシ)に、一般のウォッチャーがひとことになり、可成り活性化させるために観光客を町に呼び寄せる案であり、地元住民に海鳴乳類への理解を深めるためのものでもあります。学術的講演会、ホエール・ウォッチングなどのイベント、先住民の語りや踊り、地元アーティストの即売会、地元小中学生の海鳴乳類を

テーマとしたアート作品展、ホエール・ランというアクティビティ付きマラソン大会、海鳴乳類関係作家のサイン会など、あらゆる分野で海鳴乳類に關係する人々が協力しあっている。また町のホテルやレストラン、みやげ屋、アラスカ航空も開業期特別の格安価格にして協力しています。

(<http://sitkawhalofest.org/index.html>)。

主催者をはじめ多くの人々がボランティア



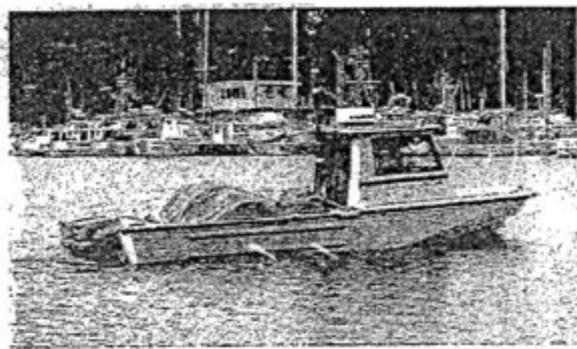
参加で、外部からの参加者(主に観光客)は予約のうえ参加費が必要だ。この収益は

招待講演者の旅費や滞在費、オリジナルグッズ、Tシャツ、マグカップ、キャップ等の作成販売、次回の開催費また海鳴乳類の保護や教育活動等に使用される。

新発見！

ホエール・フェスタでの私の講演は、小笠原の歴史から始まり、小笠原に來遊するワシワシとアオウミガメの簡単な生態と海洋センターの調査研究内容および教育活動など地域での働きを紹介する。この講演を聴いた。特にサトウワシは、アラスカの町で見つけたばかりのワシ(北極海鳴乳類研究所による移動を中心)、北太平洋で日本のワシがやうな位置を占めているかを説明した。ワシの、小笠原は、1989, 1992, 1994, 1995, GEORGE BROWNにわたり確認されたワシを漁っていたことがあったため、メスと雄を区別している。アラスカ州でのワシの観察されたのは、この講演者であった地元研究者のハーローンさんと、アラスカ半島のシムリアン諸島周辺で1000年間に撮影されたワシのワシは、異なる海域で、それぞれの観察地と区別されていたため、区別が区別や異なる記号のワシになり、区別が区別

えに考えたあげく、その名が「カザミ」(馬鹿)となりました。日本のホタテ調査船「カザミ号」をアラスカ水産局がもらい受け、フリーさんがこの船を頻りに調査に使用していたことが所以です。



カザミ号

現在小笠原はサトウクツラのシーズン真っ盛り。「カザミ」に会えるのも大変な事、がんばって調査に訪みたいと思ふ所。

原記・クツラなどのサトウ、小笠原中学校、V. Shinaro Blatchley 中教、及び田中君を助

成している子供達が文筆をはじめのびつとして
います。

カナダ編

十一月末から十二月初めまで、カナダのバンクーバーで行われた海棲哺乳類学会に参加しました。この学会は、アメリカを中心に各地で二年に一回行われるので、今回はシヤチなど海棲哺乳類の多い土地柄であり、食米からアクセスしやすい場所であったため、参加者は過去最高で二千五百人近かったようです。

(<http://www.smmconference.org/fransect.html>)

海棲哺乳類と面してもその種は因らなく、イルカ、クツラをはじめマナティやシロクマにいたるまで、様々な生物でCGや衛星など最新機器を用いた研究発表も数多くありました。またこの学会は、遠くはなれてほとんども顔を合わせる機会がない研究者間の二年に一度の貴重な情報交換の場となります。

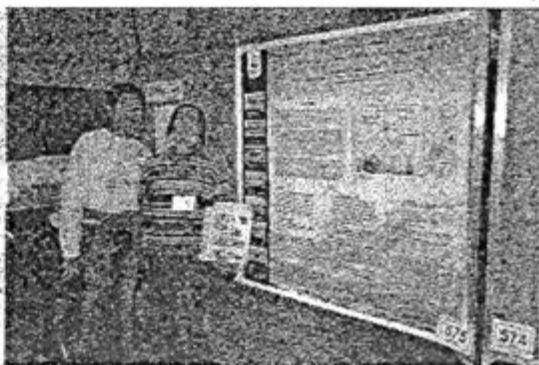
今回の私のこの学会参加の主な目的は、ハワイ、メキシコ、アラスカ、カナダ、カリフォルニアなどの北太平洋の各地でサトウクツラの調査研究に携わる皆さんと情報を交換し、小笠原で撮影したクツラの尾コブのカタログ

を手渡して、照合作業を依頼するところでありました。ロシアの記録調査に携わられている皆さんともお話することができ、我々の調査研究に協力していただけるようお願いしました。

新発見！

数日多くの発表が同時進行する中、せむむらサトウクツラの発表も数多くありました。一番興味があったのは、とても身近なフィリピンで行われたサトウクツラのポスター発表でした。このポスターの題は「バックリー」のポスターには、7頭の黒いクツラの写真が張り出されていますが、見覚えのあるクツラが2頭！手持ちの小笠原のカタログを聞いたところ、同じ種、いや同じ種類のクツラがいたので、なんとだかわけちがわず、その写真を撮影されたフィリピン人のシムムさんと話を合せて飛び跳ねてしまいました。

シムムさんはフィリピンのWWF(世界自然保護基金)で働かれており、一九九九年から調査をはじめて現在9頭のクツラの写真が撮影されています。小笠原に帰国後さらに調べたところ、現在この9頭のうちの2頭が小笠原で見られていたことがわかりました。そのうちの2頭は正確には別の個体だ



左) ジョムさん 右) 山口

あ、共同でマキシング作業を遂行している沖縄公團水族館に連絡して、いよいよ「頭好野郎」(マキシング)「(前)非野生保護センター」(マキシング)の調査員と共同で調査を行いました。

ジョムさんと私の仕事はほぼ終わったばかりで、我々の十数年間の姿を見ることができました。これで北太平洋の西側でサトウクツシラが観察されている場所は、日本、台湾、フィリピン、マリアナ海域となりました。このアジア近辺のサトウクツシラは、何頭もいるのか、それだけか、それ

れという関係にあるのか、夏はここへ餌を食へに行くのか、それぞれ地元で調査されている方々と情報を交換し、協力して解明していきたいと思っています。

小笠原群島センター

山口 真名実

海外だより パリ島のアオウミガメ

パリ島のアオウミガメの捕獲は希なことです。

インドネシアで唯一のアンズー教徒であるパリ人によってウミガメは神聖なもの、三百年前あるアンズー教の寺院の祭礼には欠かせない供物となっています。そのため、国の法律では禁止されているウミガメ類の捕獲もパリ人に対しては、暗黙の了解があったようです。しかし、その捕獲数を見てみると一九九九年には三万七千頭ものアオウミガメが捕獲されていた、こんなに必要なのかと聞かれる数です。どうも実態は、祭礼と言ったよりも経済価値として商業ベースに乗っていたようです。パリ島への観光客の六割がオーストラリア人、四割が日本人です。捕獲されたウミガメは、ホテルやレストランに売られています。

した。どうも、ほとんどの観光客はウミガメの肉だとは知らずに食べていたようです。しかし、それによってパリの人たちはウミガメの捕獲者が大好物なのでも。

一方で、WWF-Indonesia はインドネシアのアオウミガメ資源が減少していることを憂い、ウミガメの元締めを裁判所に訴えたので、Wawa という名の保護団体に認められ、八年の刑を課せられた。現在は監獄にいます。裁判中には WWF のパリ島事務所が焼き討ちの会があったことがありました。しかし、彼らはウミガメを守るために立ち上がり、不条理な暴力にも屈することなく勝利を確めたのです。二〇〇一年の四月から、インドネシア政府はパリ人にウミガメの捕獲権を三百年と制限しました。この政府によるアオウミガメ資源の保護対策の結果、かつて、毎年数頭ずつに入れられていたアオウミガメの生け簾の中には、昨年の秋に私が見たウミガメ、百頭の数頭しか入っていませんでした。

パリ島は、ウミガメを保護しているという人、ウミガメを捕獲する人、昔から食べ続けている人、そんな人々が交錯しています。

副会長 藤田 隆行

ウミガメ基礎講座 2

なぜウミガメの放流会は保護にならないのか

孵化した子ガメは、一時的にとらえられ、放流会などで人の手を経て不自然に海に放れることがあります。放流会には地域の子供達とその父兄が参加することが多く、教育および啓蒙効果を期待して行われているようです。しかし、最近の学術的研究によって明らかにされたウミガメの生態と照らし合わせてみると、放流は保護に繋がらないどころか、かえってウミガメの生存に決定的な悪影響を及ぼしかねないことがわかってきました。

自然界では、子ガメの地表への脱出は夜間に起こります。暗闇の中で脱出した子ガメたちは、ほのかに海の方が明るいことを手がかりにして、一気に海へと向かいます。そして、海に入ってから、波に逆らって泳ぎます。脱出してから約二十四時間だけは、休憩ことなく泳ぎ続けます。このような習性は、鳥や魚などの捕食者が多い沿岸域からいっしょに離れ、保育場に運んでくれる海流に乗って生き

残るために役立つと考えられています。また、ウミガメには地磁気の変化を感じる能力があるのですが、砂浜を駆けたり、波に逆らって一定方向に進み続けている間に、その基準となる磁場が刷り込まれるのです。ウミガメは、生涯を通じて大洋を大回遊しますが、地磁気コンパスを活用していると証拠も見つかっています。したがって、子ガメが脱出してから海に入っていくまで間は、単に生まれした砂浜を後にして海へ旅立つというだけではなく、その個体の将来にまで深く影響する能力の獲得が行われる過程でもあるのです。

一方、放流会に供される子ガメは、事前に確保されているため、すでに遊泳能力が低下して、沖までたどり着ける確率も下がります。数日間保管された子ガメの中には、うちよせる波に逆らって海に入っていく余力さえ残っていない個体もいるでしょう。放流会は人間の都合で風間に行われることが多く、その結果、子ガメが海に入ると同時に、魚や大型の鳥に捕獲されるという皮肉な光景を目にすることがあります。仮に夜間行われたとしても、子ガメの姿を見るためと参加者

の安全のために、ライトが点灯されることとなります。砂浜を闇の中で歩くことを許されなかった子ガメは、生涯の指針となる能力を身につけさせずに、一体、何を頼りにどこへ泳いでいくのでしょうか？

放流することが保護であるかのような錯覚がいつの間にか流布していますが、ウミガメの野生生態を無視した狂りやがりの善意は、暴力以外の何物でもありません。本当にウミガメを保護したいのであれば、放流会を止める必要があります。それでも教育的な理由など他の目的から放流会を実施するというのであるなら、少なくとも主催者はこれらのことをしっかり認識した上で、決して保護になるとは言わないべきでしょう。

第十二回日本ウミガメ会議 (高鍋会議)の報告

ウミガメのシーズンも終わり秋も深まる頃になると、協議会事務局は「日本ウミガメ会議」の準備で、シーズン中とはまた違った慌ただしさを迎えることになりす。

この会議は日本各地でウミガメに関わっている方々が一堂に会して情報の交換と交流を行う事を目的に毎年開催していますが、一貫して保護や利用といった主観や思想をメインテーマに掲げずに、ただウミガメのことを淡々と話しあうことに主眼をおいています。

元々ウミガメに関心を持つ人間がビール片手に寄り集まった会議ですので、屋よりも夜の部がメインなのですが、参加いただく皆さんにも意志を明確にせず淡々と事実だけを話し合ってもらっています。そうすることによってウミガメの生活や抱えている問題を鮮明にしていくことをモットーにしており、これまでに鹿児島(一九九〇年)を皮切りに、宮崎、愛知美浜、和歌山南部、徳島日和佐、静岡県湖西、沖縄名護、高知大方、屋久島、

静岡御前崎、熊本牛深と回を重ね、昨年の十一月十六日から十八日に行われた高鍋会議で十二回目となりました。

初日の公開シンポジウムは地元の子どもたちによる「じろま踊り」に始まり、海外講演者のスコット・エッカー博士によるオサガメの回遊と行動や太平洋を横断したアカウミガメの追跡についての講演に続き、宮崎野生動物研究会や高鍋自然愛好会など地元からの講演がありました。翌日にはウミガメ基礎講座と一般講演が続き、発表は口演が二十九件、ポスターが十四件ありました。

そして参加者も二百七十名という、これまで行って来たなかでも一番多くの方にご参加いただけました。そのなかでも特に印象深かったのが地元参加者の熱心さです。ウミガメに関するあらゆるものに興味を示していた子供たちをはじめ、交代で受付をお手伝いしていただいた方やロビーに掲示してあるパネルを熱心に見ているご年輩の方まで、本当に大勢の方が熱心に講演を聞いておられました。もともと高鍋町は古くから城下町として栄えた歴史と文教の町と聞き、大変勉強熱心な土地柄なのだと思感

しました。

十七日夜に行われた懇親会という名の「大宴会」は、色んな立場や世代の方とざっくばらんに話をする事ができるもので、会議開催においては最も重要な一番の楽しみとなっています。毎年恒例となったオークションを始め、地元の方々による多くの寄付や差し入れて、非常に盛り上がりを見せました。地元名産のガキを振る舞って頂きましたし、全国的に有名な造り酒屋の黒木酒造からは、めったに口にする事の出来ない焼酎(百年の孤独!)をふんだんに振る舞っていただきました。また、毎夜繰り出した夜の町でも、行く先々で本場に親切にしてくださいました。

会議のエッセンスはここに集約されます。どの席でも笑いの花が咲き、時に真剣な口論となり、先輩は若人の酒量を嘆き、若人は先輩の酒量に感嘆します。こうして年に一度のカメ屋の大宴会は「今年もご苦労様でした」と互いを労い、また来年へとつながっていくのでした。

事務局

通事 太一郎

今日もボランティアは元気です！

その1

小笠原編

今回からはじまるこのコーナーでは、小笠原をはじめ、各地でウミガメ協議会のボランティアとして汗を流してくださっている皆さんにスポットを当てて、その仕事振りや生活の様子を紹介し、ボランティアの生の声を聞きたいと思えます。

小笠原海洋センターの仕事は多岐にわたり、多人数必要な調査などが多いため、数名の職員だけではとうてい不可能なことがたくさんあります。しかし、これを実現し支えてきてくれたのは、ボランティアの皆さんの力です。

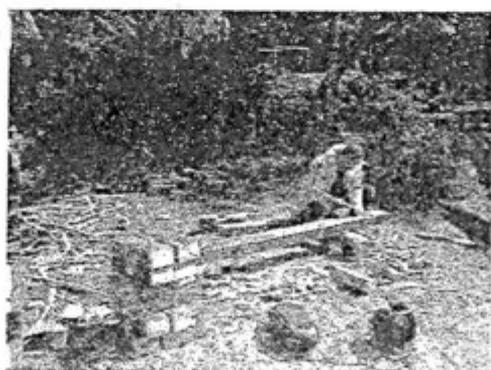
一九八二年（財）東京都海洋環境保全協会による開館当初から、二〇〇一年四月に日本ウミガメ協議会が引き継ぐまで、実習および研修生を含む約三二〇名のボランティアの皆さんが海洋センターで寝食をともにしてきました。その後も、ボランティアパワーは絶えることなく、島内の通りボランティアも増え、海洋センターは相変わらず若い人達の声で賑わっています。仕事内

容は、調査補助、データ整理、カメの飼育、館内整備等、多々あります。例えばサトウクジラ調査真っ只中の二月海がしけると写真のような様子が見られます。



データ入力をする石原彩恵さんと、クジラの写真を照合する井上尚子さん

最近、島内のイベントや活動などにどんどん参加するボランティアも増え、また夏の観覧会の子供達と接すること、「小さなお友達」ができることも少なくないようです。ありがたいことに、地元の漁師さんや農家の皆様をはじめ多くの方々からの差し入れもあ



勇材を使って館内のテーブル&ベンチ製作に励む津田直樹君

り、食卓はいつも賑やかです。某漁船の船長さんなどは、開館期には「ボランティア感謝デー」なるものを催して沖に連れて行ってくださったたり、海洋センターが多くの方々に支えられていることがよくわかります。

かつてボランティアであった皆さんからも、たびたびお便りをいただきました。ボランティアカップルも誕生し、なんとお子さんまで産まれていました。たくさんのお食品が詰められたダンボールが届くこともあります。食品会社から

就職された方が、試供品や袋詰め間違え品等も送ってください、中身と外身の違うシトルトなどは皆でエキサイトする場面のひとつです。

そんなボランティアの皆さんに、ザトウクジラやウミガメのこと、チームワークで行う調査、データ処理の仕方、情報交換、共同生活や島民とのふれあいなど、いろいろな間になるべく多くのご意見を吸収してもらえればと思います。来季からは、ボランティアの生の声でこのシーズンを描きたいと思っております。小笠原でのボランティアについては、このページ質問・ご感想をお寄せいただけます。

kamecenter@k9.dion.ne.jp

<http://www4.osk3web.ne.jp/~umimga/mc/OMC.html>

小笠原海洋センター

山口眞名美

平成十三年度 小笠原海洋センター
ー ボランティア・実習生・共同研究者リスト(3月末現在)

中山 えみ、山田 眞嗣、酒井 充、川本 亜紀、橋田 光、河野 つかさ、三木 公夫、阿部 奨子、中野 康浩、中島 士郎、金澤 優香、安江 正、荒内 久美子、甘中 裕美子、藤井 智子、安江 栄輔、清水 千帆、谷川 篤史、矢内 翔子、阪野 真人、左古 貴典、金剛 明香、片岡 美由紀、五十嵐 幸恵、田中 美也子、渡辺 沙耶歌、八束 直子、石田 真澄、中山 朝日、今井 裕行、田上 志穂、田中 孝尚、円山 はるな、田村 友里、石原 彩恵、井上 尚子、津田 直樹、田中 麻紀子、安河内 澄子、内藤 桂太、竹上 健太郎、堀井 直人、井ノ口 栄美、山田 裕子、

ウミガメの来訪IN小豆島

瀬戸内海・播磨灘に浮かぶ香川県・小豆島。その島で二〇〇〇年七月八日に初めてアカウミガメの産卵が確認されました。そこで、今度ウミガメとの接点は何もなかった地域で、産卵を通じてウミガメと地元住人がどう関わっていったかというお話をしてみました(聞き手Kk)。

日本におけるアカウミガメの産卵のほとんどが、南日本の太平洋に面する海岸線および南西諸島にかけて行なわれています。しかしながら、この小豆島を含む瀬戸内海東部のような閉鎖性水域(すなわち内海)でも、少ないながらも産卵が確認されています。

オリーブや磨石の採石、二十四の瞳の舞台として有名な小豆島。その最南西・土庄町の戸形崎の海岸で、二〇〇〇年七月八日に初めてアカウ

ミガメの産卵が確認されました。小豆島で産卵が確認されたのは初めての出来事で、「ウミガメがやってきたー」ということ自体で町全体の関心度が非常に高く、さまざまな機関の人たちが関わっていくこととなりました。

発見者は産卵が行なわれた海岸の目の前にある小学校の児童たちで、その後この戸形小学校の児童・先生方が中心となって取り組んでいくことになりました。しかしながら、なにぶんウミガメとこれまで何も接点がなかったため、すべてにおいてどう対応していいのかからず苦労されました。

まず始めに、産卵された場所が大潮の満潮線下になるかもしれないという点で、地元の漁業組合の方に現地を視察してもらいました。案の定、満潮線下になるということで、「急いで卵の移植をしなければ」となり、小学校の先生がウミガメ協議会に連絡を取り、アドバイスを求められました。そして児童たちの手

で移植が行なわれました。しかしながら、埋めなおした場所や卵の状態などを心配しておられました。そこでウミガメ協議会から私が派遣され、現地の調査へ向かいました。

《写真1》調査した結果、再度別の場所へ移植することになりました。



写真1 産卵された卵を別の場所に移植する戸形小の児童たち

その時にも町の教育委員会の方たちが色々な活動を支援してくださいました。さらに卵を埋めなおした場所のパトロールに、地元警察が協力してくれました。そしてなんといつて



写真2 小学生から表彰を受ける筆者

も地元自治体および小学校の児童たちが、その後も海岸保全などに努められ、たえずこの一連の出来事に関心を持ち続けていました。その結果、この夏は小豆島からウミガメの話題が消えることはありませんでした(ちなみにふ化は無事に八月三十一日にウミガメが産卵してふ化したという出来事だけではなく、地元の学校で環境教育の一環として授業に取り入

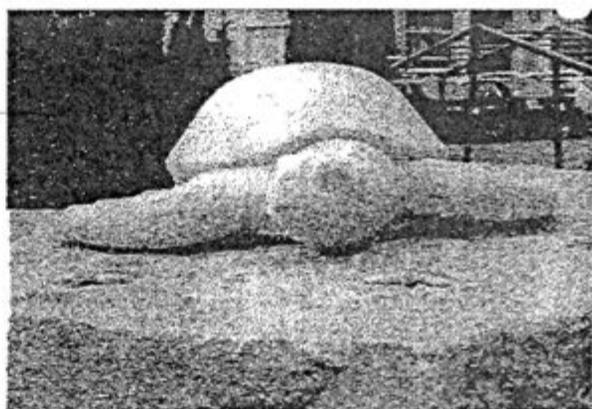


写真3 アカウミガメの石像

れられたりと《写真2》、ウミガメという言葉が地元の方たちの生活の中に浸透していくこととなりました。ふ化が終わった後でも、ウミガメの歌が〇〇化されたり、小学校のシンボルマークにウミガメが使われたりとウミガメの勢いは止まりませんでした。そしてついには、《写真3》産卵を記念してウミガメの石像まで出来てしまいました。翌年(二〇〇一年)も産卵シーズン前になると、「ウ

ミガメさん見回り隊」なるものを地元の方たちで結成され、海岸保全やその他色々ウミガメに対する活動を行なって行きました(残念ながらこの年は小豆島で産卵は確認されませんでした。ですが、これからも活動は続けていかれる予定です)。

このように、一つの出来事が様々な機関および地元住民の方たちに大きく関与していきました。それがウミガメの産卵に関わった方たち、個人個人でとらえ方は様々でしょうが、私がこの小豆島での経緯を見る限りでは、町全体を取り込み活性化になったのは間違いないと感じました。

大鹿運弥・会員、須磨水族園勤務

協議会 活動報告 (2001年10月から2002年3月)

- 10月 アメリカ・デューク大学 Larry Crowder
博士他 3名来訪
豊橋市ウミガメ保護啓発ビデオ制作監修
(亀崎)
中日新聞取材 (混獲問題等)
渥美町ふ化状況調査 (渥美町ウミガメ保
護連絡会との共同研究) (松沢・宮形・今井)
インターネットサイト“GambaNPO”に
寄付募集をアップ
静岡テレビ取材 (ふ化放流会の問題点に
ついて)
大阪コミュニケーションアート専門学校よ
りインターンシップ学生受け入れ
日和佐うみがめ博物館英文パンフ制作協力
静岡県御前崎町人工ふ化指導 (菅沼・田中)
徳島県ウミガメ調査報告会にて講演 (亀崎)
日本動物園水族館協会種の保存会議にて講
演 (亀崎)
日本両生爬虫類学会出席発表 (亀崎)
JICA、海洋センターを視察
- 11月 なぎさ海道市民ネットワーク交流会参加 (神
戸市、朽見)
スコット・エッカート博士来日 (ウミガメ
会議講演招待)
第12回日本ウミガメ会議開催
シトカ・ホニールフェストにて講演、海棲
哺乳類学会出席 (山口)
アカウミガメ資源解析モデルワークショッ
プ参加 (ハワイ、松沢・山口)
日本両生爬虫類学会出席・発表 (新潟 亀
崎)
書籍「日本のアカウミガメの産卵と砂浜環
境の現状」試作本完成
海洋センター、ホール改修
- 12月 第4回世界両生爬虫類学会出席・発表 (ス
リランカ、亀崎・宮形)
エフエムひらかた出演 (亀崎)
クジラの尾びれポスター制作
姫路国道工事事務所来訪
環境省生物多様性センター会議出席、野生

- 生物保護学会 2001年大会出席・発表 (近藤)
土佐国道工事事務所日館氏他来訪
雑誌『できるインターネット』取材
NHK宮嶋氏取材
読売新聞取材 (ウミガメ人工衛星追跡)
雑誌『Be-San』取材
須磨水族園にて混獲死タイマイ解剖 (松沢・
大鹿)
南部出張、次年度調査打合せ (亀崎・松沢)
- 1月 平成13年度事業報告書を内閣府に提出
徳島県立水産高校にて特別講義 (亀崎)
学研取材 (小中学生向け図書制作)
- 2月 アカウミガメ保護シンポジウムIN明石、
明石市と共催
西部太平洋ウミガメ共同研究および管理に
関するワークショップ発表、アオウミガメ資
源解析モデルワークショップ参加 (ハワイ、
菅沼・松沢)
NHK宮嶋氏取材
西九州ウミガメ会議講演 (福岡県津屋崎町、
亀崎・通事)
福岡県津屋崎小学校にて講演 (亀崎)
環境省近畿事務所会議出席 (朽見・宮形)
枚方市立菅原東小学校にて講演 (亀崎)
日本ベッコウ甲協会と米国のウミガメ研究者と
の協議に参加 (フロリダ、亀崎・松沢)
明日の東播海岸を考える会議講演 (亀崎)
- 3月 阿南市教育委員会勝瀬氏他来訪
タイマイ増養殖推進委員会 (東京、松沢)
東日本ベッコウ甲組合にて講演 (東京、松沢)
帝國機器取材
アカウミガメオス生殖器の解剖 (神戸大学、
亀崎・大鹿・黒柳参加)
網野町着タイマイ調査 (亀崎・宮形・大
鹿・伊藤)
モルジブタイマイ生態調査 (モルジブ 亀
崎・黒柳)

《協議会職員および会員の業績紹介》

【原著論文】

1. 亀崎直樹・服部正策・鈴木博 (2001) 奄美諸島・加計呂麻島におけるタイマイ繁殖の初記録. 爬虫両棲類学会報, 2001(1)16-17.
2. Matsuzawa, Y., Sato, K., Sakamoto, W., Bjorndal, KA (2002) Seasonal fluctuations in sand temperature: effects on the incubation period and mortality of loggerhead sea turtle (*Caretta caretta*) pre-emergent hatchlings in Minabe, Japan. *Marine Biology*, 140(3)639-646.
3. 太田英利・菊川章・亀崎直樹 (2002) 沖縄のウミガメはどんな砂浜が好きか: 重回帰分析によるアプローチ. 海中公園情報, 134:3-7.
4. 田中真一 (2001) イリヤンジャヤにおける「オサガメ」保護活動の背景. うみがめニュースレター, 50: 2-7.
5. 稲谷和則・笹川二成・亀崎直樹 (2001) 種子島長浜海岸のアカウミガメの上陸・産卵状況と上陸密度に関する若干の考察. うみがめニュースレター, 50: 8-13.
6. 松下福代・田中真一・菅沼弘行 (2002) 茨城県で産卵されたアカウミガメの卵胚の死亡と先天性奇形. うみがめニュースレター, 51:2-6.
7. 田代真澄美・長瀬美保・松沢慶将・大鹿達弥・亀崎直樹 (2002) 和歌山県白浜町で捕獲されたタイマイ2個体の消化管内容物. うみがめニュースレター, 51:7-10.
8. 亀崎直樹・大池辰也・浅井康行・黒柳賢治 (2002) 八重山諸島に生息するタイマイの *Hapalotrema orientale* の感染. うみがめニュースレター, 51:11-14.

【書籍】

- 「日本のアカウミガメの産卵と砂浜環境の現状」(2002) 亀崎直樹, 通事祐子, 松沢慶将編.
日本ウミガメ協議会, pp162.

【学会発表等】

1. 近藤鉄也・山口真名美・菅沼弘行・堀越和夫.
"小笠原諸島で産卵するアオウミガメ"
野生生物保護学会 2001 年大会, 兵庫県立人と自然の博物館 12/14-16, 2001
2. 亀崎直樹・阪本いづみ・阪本時彦.
"モルジブ・ヴァドゥ島近海におけるタイマイのサイズ分布と成長速度の関係"
第 40 回日本両生爬虫類学会, 新潟大学 11/10-11, 2001.
3. Kamezaki, N., Sakamoto, I., Sakamoto, T.
"Coral Reef Habitat Use of the Hawksbill Turtle, *Eretmochelys imbricata*, in the South Male Atoll of Maldives." in Forth World Congress of Herpetology, Dec4-9, 2001 in Sri Lanka.
4. Kamezaki, N., Matsuzawa, Y., and Suganuma, H.

"Population trends and mortality of Japanese loggerhead turtles, *Caretta caretta*, in Japan." in Western Pacific Sea Turtle Workshop, Feb 5-8, 2002 in Honolulu.

5. 松沢慶将・亀崎直樹・菅沼弘行・中島義人・加藤弘・田名瀬英朋・宮脇逸朗。

"日本沿岸におけるアカウミガメの死亡漂着の現状と考察"

2002年度日本水産学会大会, 近畿大学農学部 4/1-5, 2002.

6. 畑瀬英男・後藤清・佐藤克文・坂東武治・松沢慶将・坂本亘。

"体サイズの年変動から推察されるアカウミガメ産卵期の減少要因"

2002年度日本水産学会大会, 近畿大学農学部 4/1-5, 2002.

7. 亀崎直樹・島達也・黒柳賢治・浅井康行。

"琉球列島八重山諸島近海のタイマイの個体群構造"

2002年度日本水産学会大会, 近畿大学農学部 4/1-5, 2002.

8. 梅田奈夫子・横山佐一郎・亀崎直樹・島達也。

"琉球列島八重山諸島に生息するアオウミガメ・タイマイの体成分組成"

2002年度日本水産学会大会, 近畿大学農学部 4/1-5, 2002.

【関連記事】

<インタビュー>

ウミガメと日本の環境—亀崎直樹さんにきく—。水情報、21(5)

日本ウミガメ協議会会計報告(平成13年度)

平成12年11月1日より平成13年10月31日

単位:千円

収入の部	
会費収入	989
助成金収入	7,107
事業委託収入	28,631
ウミガメ会議参加費収入	302
寄付金収入	1,374
その他収入	5,276
収入の部計	43,629
支出の部	
自然環境保全事業	14,997
調査・研究事業	4,354
ウミガメ会議開催費	1,018
情報提供事業(速報・会報)	50
うみがめニュースレター支援	150
管理費(人件費・事務所賃借等)	22,265
支出の部合計	42,834
当期収支差額	795
前期繰越収支差額	4,493
次期繰越収支差額	5,288

各費目のうち主なものは、次のとおりです。

助成金収入	単位:千円
環境事業団地球環境基金	2,747
日興グリーンインベスターズ	2,000
公益信託終団連	1,000
世界自然保護基金ジャパン	460
事業委託収入	
東京都小笠原村	15,320
日本べっ甲協会	12,010
東京都海洋環境保全協会	1,100

寄付金をいただいた方々(順不同・敬称略・3月末まで)

二河田日和、櫻切陽子、木村ジョンソン、佐藤克文、大室味ウミガメを愛する会、ネル・ポーモント、指宿文一、後藤清
神楽坂女声合唱団(小林カツ代)、牧野伸一、新岡誠、鈴木康平、行之内尚久、田口麗、西田雄祐、金城正助、斉藤亮
大平浩平、東日本べっ甲組合、田後伸夫、小川慈恵、GambaNPO匿名3件、徳念寺岡田佐藤、田中三貴、佐藤孝子
森下静子、須志田忠七、佐野茂子、佐藤伍郎、河野俊昭、花崎勝司、森田和夫、大地理、近藤康男、井上祥夫、
朽見和男、山田輝一、栗村知恵、テレビ大阪川辺、徳永章二

平成13年度は、協議会にとって大きな節目の年でした。

4月に小笠原海洋センターと、東京事務所の運営を開始し、それに合わせて職員を増員しました。

運営資金調達のため、収益事業を開始しました。図書の販売とアクセサリ(ピンバッチ・ストラップ等)の制作・販売です。特にアクセサリは約100万円の売上があり、収支に大きく貢献しましたが、収益事業には所得税が課税され、国税・地方税あわせて約10万円を納税しました。(平成14年度収支に計上されます)

『NPO支援税制』という制度があります。これは、一定の要件を満たしていると国税庁の認定を受けたNPO法人に対して、「認定NPO法人」という資格が与えられ、認定NPO法人に寄付をした者に、寄付金控除が受けられるという制度です。

認定NPO法人になるためには、かなり厳しい条件があり、平成13年度決算に基づいて試算したところ、ウミガメ協議会は、残念ながらまだ認定される要件を満たしていません。理由は、総収入に占める寄付金等の割合が、3分の1以上ないからです。これはかなり厳しいハードルであり、全国で6000以上あるNPOのうち、5団体しか認定を受けていません。規制緩和の法案が最近国会に提出されましたが、成立には至りませんでした。日本の税制はNPOにはまだまだ厳しいものです。

事務局 朽見 健一郎

会員の募集について

日本ウミガメ協議会の会員数は、四月末現在で五〇〇名を超えました。会の健全な運営には、会員の皆様からの会費が貴重な財源となります。協議会では賛助会員（STSメンバーズ）を募集しています。

皆様のお近くに、ウミガメに興味のある方や、海洋環境に興味のある方がおられましたら、ぜひウミガメ協議会をご紹介下さい。入会案内パンフレットがご入用であれば、ご連絡下さい。

ウミガメ協議会 年会費の納入について

日本ウミガメ協議会の事業年度は、毎年十一月一日から翌年十月三十日までとなっております。

本年度の年会費を未納の方には、会費振込用紙を同封致しておりますので、お早めに郵便局でお振込をお願い致します。（振込手数料は無料です）

頒布品のご案内（書籍）

- | | |
|-------------------------------|---------------|
| 1. ウミガメは減っているか～その保護と未来～(残部僅少) | ¥2,100 |
| 紀伊半島ウミガメ情報交換会・日本ウミガメ協議会共編 | |
| 2. 日本のウミガメの産卵地 | ¥2,100 |
| 日本ウミガメ協議会発行 | |
| 3. うみがめニュースレター No.1~47 | 会員価格 ¥7,000 |
| うみがめニュースレター編集委員会発行 | (一般価格 ¥9,000) |
| 4. 岩波現代日本生物誌 イルカとウミガメ | ¥1,995 |
| 亀崎直樹・吉岡基共著 | |
| 5. ウミガメの旅 太平洋2万キロ | ¥997 |
| 香原知志著 亀崎直樹監修 | |
| 6. 写真集 クジラの尾びれ | ¥2,800 |
| 7. 日本のアカウミガメの産卵と砂浜環境の現状 (新刊) | ¥3,200 |

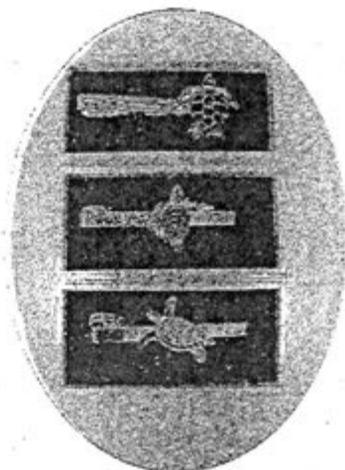
頒布品のご案内（その他）

- | | |
|-------------------------------|--------|
| 1. ピンバッチ (アカウミガメ・アオウミガメ・タイマイ) | ¥300 |
| 2. 携帯ストラップ (アカウミガメ・アオウミガメ) | ¥400 |
| 3. ウミガメ協議会ステッカー | ¥150 |
| 4. ウミガメネクタイピン 各種 | ¥1,000 |
| 5. ポスター くじらの尾びれ | ¥1,000 |
| 6. ウミガメ絵葉書7枚セット(写真3点、イラスト4点) | ¥1,000 |

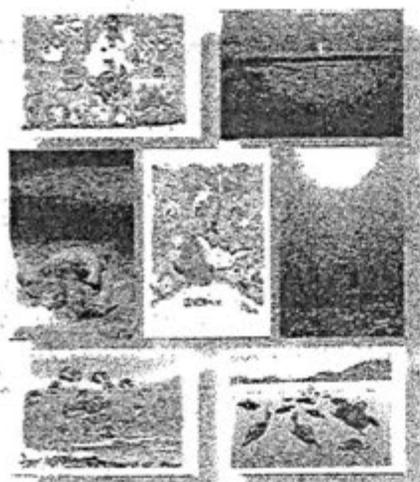
タイマイピンバッチと携帯ストラップ、絵葉書セットは新製品です。
書籍・グッズともお問い合わせ・お申込みは事務局までお願いします。



ピンバッチ3種とアカウミガメストラップ
アオウミガメストラップも同仕様です



ネクタイピン3種



ポストカード7枚組セット



日本のアカウミガメの
産卵と砂浜環境の現状

マリンタートラー (日本ウミガメ協議会機関誌)

第2号

発行 日本ウミガメ協議会事務局
 発行日 2001年5月15日
 〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町 5-17-18-302
 電話：072-864-0335 FAX：072-864-0535
 URL：http://www.umigame.org
 E-mail：info@umigame.org